

に至り、草津川の河津にして衣を洗ふ時に、商人大なる船に荷を載せて過ぎむとす。船長嬢を見て言ひ煩し嘲し囁る。女言はく「黙せよ」といふ。女言はく「人を犯さば頬を痛く拍たれむ」といふ。船長聞きて瞋り、船を留めて女を打つ。女痛く拍たれず、船の半を引き居る、舳を下げて水に入る。津の辺の人を雇ひて船の物を持ち上げ、然うしてまた船に載す。嬢言はく「礼無きが故に船を引居う。何故ぞ諸人賤しき女を陵がしむる」といふ。船の荷を載せながら、また一町程引き上げて居う。茲に船人大に惶り、長跪きて白して言さく「犯せり。服はむ」とまうす。故に女聴許す。彼の船五百人して引けども動かず。故に知る、彼の力五百人の力に過ぐと。経に説きたまふが如し「餅を作りて三宝を供養するひとは金剛那羅延の力を得」とのたまふ。是を以て当に知るべし、先の世に大枚なる餅を作りて三宝と衆の僧とを供養し、此の強き力を得たり、と。

極めて窮しき女釈迦丈六仏に福の分を願ひて奇しき

表を示し現に大なる福を得る縁 第二十八

聖武天皇の世に、奈羅京の大安寺の西里に一の女人有り。極めて窮しく、命を活くるに由無くして飢う。流へ聞くななく、大安寺の丈六仏は衆生の願ふ所を急に能く施賜ふとて、花と香と油とを買ひて丈六仏の前に参往きて、奉白して言さく「我れ昔の世に福の因を修はずして現身に貧窮しき報を受取る。故に我れに宝を施ひて窮の愁を免れしめよ」とまうす。日を累ね月を経て、願ひ祈りて息まず。常の如く福を願ひて花と香と燈とを献り、家に罷りて寐て明日に起きて門の椅の所を見れば、錢四貫有り。短箱を著けて注して謂はく「大安寺の大修多羅供の錢」といふ。女人恐りて急に之れを以ちて寺に送る。時に宗の僧等錢を入れたる蔵を見れば、封の印誤たず、ただし錢四貫のみ無し。故に取りて蔵に納む。女また丈六の前に参向て、花と香と燈とを献り、家に罷りて寝。明日に起きて庭の中を見れば、錢四貫有り。また短箱に注して謂はく「大安寺の常修多羅供の錢」といふ。女以ちて寺に送る。宗の僧等、錢の器を見れば、封誤たず、開き見ればただし錢四貫のみ無し。怪びて蔵め封す。女先の如く丈六の前に参往きて、福の分を願白して家に罷りて寝。明日に戸を開けて闔の前を見れば、錢四貫有り。短箱を著けて謂はく「大安寺の成実論宗分の錢」といふ。女以ちて寺に送る。宗の僧等、錢を入れたる器を見れば、

態をいう。水につかっているのは船尾である。したがって、ここに「舳」とあるのは船尾。中国、日本では「舳」「舳」のどちらが船首をさし、どちらが船尾をさすかについてはさまざまにみえ、一定していない。「舳」の訓も「へ」とものいずれにしたがうべきか明確ではないが、「とも」が船尾を意味するとする和名抄に拠って、訓は「とも」にしたがう。六舳のあたりの積荷が水没するので、積荷を移動させた。七原文載摺。船に荷を載せたそのまゝの状態。へ一〇六、余。中巻二十四縁。八原文「長跪白言は仏典語。たとえば無量壽經・下にみえる。二原文犯也。服也。中巻四縁にも「服也。犯也。惶也」とみえる。二末詳。方広大莊嚴經・八に在昔億千劫、供養三世仏、慈心行捨施、故得相莊嚴、成就那延力」とある（攷証）。三モチ米とムギの粉とを原料として作られた（和名抄）。三大力の神。ふつうの象の力の二万倍。あるいは二万倍、あるいは二百万倍、阿毘達磨俱舍論・二十七、の力があるといふ。二道場法師の孫なるがゆえに大力である、とはされずに前世の因縁が言及される。道場法師の一族は仏教説話の枠内で活躍しているといえる。一五ことさらに「大枚」とするのは、笑いをめざす。

第二十八縁 あやしき表(一)の説話。今昔物語集十二ノ十五に書承。

中巻二十四縁にも同じ地名がみえる。上巻三十二縁には「流聞大安寺丈六能隨入願」とあった。本説話の「衆生所願、急能施賜」とは微妙に相違する。八撰集百縁經六に仏塔に香、花、燈明」を供養した例がみえる。

元類似の表現は中巻十四縁にみえる。「由我前身不作福故。今日貧窮」(雜寶藏經・四)。三たとえは布施。「由我先祖不布施故、今為貧窮」(撰集百縁經・一)。「由不布施故、今受貧賤苦」(大莊嚴論經・三)。三原文故我施施。願我施福(中巻三十四縁)。「願我施福(下巻三縁)などの例を参照して、我れに」と訓む。三「以此香氣供養功德、使我來世永離貧窮下賤之身、早成正覺、廣度衆生、如我無異」(撰集百縁經・三)。「我今貧窮、用是小小燈、供養於仏、以此功德、令我來世得智慧眼、滅除一切衆生垢闇」(賢愚經・二)などのように、來世での得脱を願うのが仏典説話での通例。「南无銅錢萬貫白米萬石好女多德施」(上巻三十一縁)。「願我施福、早脫急施」(中巻二十四縁)。「願我施錢(下巻三縁)」、および本説話のように、現世での致富を願うのは、仏典説話の傾向とは異なる。三溝によつて区画された宅地には数戸の家が建てられ、その宅地から小路へは門が開かれ、溝には橋がかかけられた。四の語は大邸宅を意味しない。「橋」は東堀川にかけられたものと考えべきではない。五吉備真備が薬師如来より授かつた短箱は、長一尺計、広二寸計、であつた(覺禪鈔五所引私教類聚、東野治之の指摘がある)。六「修多羅分錢(中巻二十四縁)に同じ。中巻二十四縁。下巻三縁では、「大修多羅供錢」をさして「修多羅宗分錢」といっている。「大修多羅衆は、東大寺、弘福寺にも存した田村圓澄」。云大安寺の大修多羅宗(修多羅宗)。三「修多羅衆錢一千六百六十八貫六十一文(大安寺伽藍縁起并流記資財帳)。云中巻三十五縁より推せば、建造物ではなく調度あるいは容

ば、なほ封誤^{ふくご}たず、開き見ればただし錢四貫のみ無し。爰に六宗の学頭の僧等集會り怪びて、女人を問ひて曰はく「汝何行をかする」といふ。答へて曰はく「する所無し。ただし貧窮に依りて、命を存つに便無く、帰無く、怙^こ無し。故に我れ是の寺の釈迦丈六仏に花と香と燈とを献りて福の分を願ふのみ」といふ。衆の僧聞きて商量りて言はく「是れ仏の賜へる錢なり。故に我れ藏めず」といふ。返りて女人に賜ふ。女錢四貫を得て増上縁とし、大に富みて財饒にして身を保ち命を存つ。諒に知る、釈迦丈六の不思議の力と女人の至信とを。奇しき表の事なり。

行基大徳天眼を放ち女人の頭に猪の油を塗れるを視て

呵嘖む縁 第二十九

故京の元興寺の村に、法会を嚴備け、行基大徳を請へ奉りて七日法を説かしむ。是に道俗みな集りて法を聞く。聴く衆の中に、一の女人有り。髪に猪の油を塗り、中に居て法を聞く。大徳見て嘖みて言はく「我れはなほだ臭きかな。彼の頭に血を蒙れり。女を遠く引き棄てよ」とのたまふ。女大に恥ぢて出で罷

る。凡夫の肉眼には是れ油の色なり。聖人の明眼には見に矢の血を視る。日本国にして是れ化身の聖なり。身を隠せる聖なり。

行基大徳子を携ける女人を過去の怨と視て淵に投てし
め異しき表を示す縁 第三十

行基大徳、難波の江を堀開かして船津を造り、法を説き人を化へたまふ。道俗貴賤集會りて法を聞く。爾の時に河内国若江郡川派里に、一の女人有子^こを携きて参り行き、法会にして法を聞く。其の子哭き謹めて法を聞かしめず。其の児年十余歳に至りて其の脚步まず。哭き謹めて乳を飲み、物を噉ふこと間無し。大徳告げて曰はく「咄、彼の嬢人、其の汝が子を持ち出でて淵に捨てよ」とのたまふ。衆人聞きて、当頭きて曰はく「慈有る聖人、何の因縁を以ちてか是の告有る」といふ。嬢子を慈ふるに依りて、棄てずしてなほ抱き、持ちて法を説きたまふを聞く。明日にまた来る。子を携きて法を聞く。子なほ露しく哭き、聴く衆に障へられて法を聞くこと得ず。大徳嘖めて言はく「其の子を淵に投てよ」とのたまふ。爾の母怪ぶれども思ひ忍ぶること得

器である可能性もある。元未詳。三国仏法伝通縁起・上には、大安寺真言院の傍に涅槃堂を弘め、「常修多羅宗」と号した、とある(攷証)。「常修多羅宗」は、弘福寺にも存した(田村園澄)。
三 大安寺の常修多羅宗。
三 國爾雅注云、國音域、門限也、兼名苑云、闕一名闕音本反、之岐美、俗云度之岐美(和名抄)。門の内外を区分する横木。「しきみ」がしきみの語源。箋注倭名類聚抄。錢の置かれる場所が門橋所、「庭中」、「闕前」と、しだいに女人に近づいてきている。
三 阿梨跋摩の成実論・鳩摩羅什訳を所依として研究する学衆が成実宗(成実宗と呼ばれた。元興寺、東大寺にも存した(田村園澄)。大安寺伽藍縁起并流記資財帳には費用が計上されていない。別三論衆錢三百八十八貫五百六十四文をこれに擬するのは松浦貞俊の説。最初に大修多羅供錢、次に常修多羅供錢、最後に成実論宗分錢、と展開するが、その意味するところは不明。
三 大安寺の成実論宗。

一 諸經論を研究する学衆が「宗」として各寺に存した。大安寺にも、俱舍宗、三論宗、成実宗、法相宗、華嚴宗、律宗、の六宗が存したのである。ただし、大安寺伽藍縁起并流記資財帳には、三論衆、律衆、撰論衆、別三論衆、修多羅衆がみえ、本書によつて、修多羅宗、大修多羅宗、常修多羅宗、成実論宗の存在を知ることが出来る。二 宗(研究者集団)の長。たとえば東大寺では大學頭、小学頭、などという役があつた。三 寺に納めずに逆。四 ある結果をもたらしただけとなる縁。錢四貫を原資として富を増大させた。このような「増上縁」の語を用いるのは、仏典語の転用といえよう。

第二十九縁 三宝絵・法三に引用。今昔物語集十七ノ三十六に書承。

五 天眼通。ものの現在のかたちを見る能力。表面化されていないものをも見とおす力。仏菩薩のもつ力のひとつ。行基を菩薩としてとらえている。「故」と表現されるのはあざらしい。
六 行基の登場する説話で、女人が重要な役割をはたしているものは、本説話以外に中巻三縁、八縁、十二縁、三十縁。七 屍骨。髪に塗る油脂のひとつ。延喜式・典義寮にみえる猪膏もこれか。沢(みづ)を用いて髪に塗つたのであろう。八 奈良県高市郡明日香村大字飛鳥あたり。元興寺は本元興寺。上巻十一縁。九 血を被つてゐる。行基の眼に映じた女人の姿。猪油を髪に塗っていることをいう。二 上巻四縁。
二 大方広仏華嚴經・離世間品に、菩薩の有する十種ののひとつとして明眼がみえる。二 身を化してあらわれた仏菩薩。三 上巻四縁。

第三十縁 あやしき表(二)の説話。今昔物語集十七ノ三十七に書承。

一 行基の登場する説話で、女人が重要な役割をはたしているものは、本説話以外に中巻二縁、八縁、十一縁、二十九縁。
二 過去世における怨敵。行基にはこのようなことを知る(原文「視」能力があつた、と考えられている)のである。この力は宿命通(うきみ)とよばれ、仏菩薩のもつ力のひとつとされた。行基を菩薩としてとらえている。二 上巻七縁。
三 東大寺市。この女人は船で川を下つて難波の船津の地へ向つた(和田荅)。一 一「この表記を「子」に」と変化させている。本説話では多くのばあい「子」であり、二箇所のみが「児」。